

# 山行報告書

神戸勤労者山岳会

1. 参加者 信森

2. 山城／ルート イン谷口～ワングル道～金糞峠～荒川峠道

3. 交通手段 JR・バス

4. 行動記録

<入山日 2018年 10月 21日。 下山日 2018年 10月 22日

>

第1日 JR比良～イン谷口 8:31～(ワングル道)～10:35 釈迦岳～11:23 北比良峠～11:50 金糞峠 (テント泊)

第2日 金糞峠 7:30～8:27 南比良峠～8:51 荒川峠～(荒川峠道)～10:13 荒川峠登山口～JR志賀

5. 山行中の問題点・事故に繋がる要因

a) 予定のルート・日程で行動出来たか？

予定ルートをはずれた場合、あるいは日程が異なった場合はその理由  
予定通り

b) 事故に繋がりそうな要因（ヒヤリハット）が発生したか？

発生した場合、具体的に記す  
無し

c) パーティーで、山行中の事故に繋がる要因につき、山行後検討したか？

無し

6. その他、ルートに関する情報・気がついた事など記す

・比良は数年前から台風などの影響で徐々に荒れてきており、今年の度重なる台風・大雨で更に荒廃が進んでいると聞きますが、今回のルートに関してはそこまで大きな被害は受けていないようです。

・ワングル道も、歩き始めは倒木が多く、何本も横倒しになっていましたが、それ以外は明るく歩きやすい道でした。

・また、「難路注意」と表示がありますが、標高 870m 辺りからロープのあるちょっとした岩場が出てくるぐらいで、特に危険箇所はありませんでした。その岩場も十分に足場があり、慎重に登れば問題は無いと思います。下りに使う場合は多少注意が必要でしょう。

・迷う程ではありませんが、釈迦岳山頂へは、手前の傾斜が緩んだ所から北東方面へ少し回り込みます。

・荒川峠道は、荒川峠から標高差 50m ぐらい下った所でルートが東に折れ、谷筋に入りますが、間違ったルートに入らないよう、標識に「行き止まり危険」の表示があり、トラロ

ープが張ってありました。

・そこからは陰気な杉の植林帯で、標高 550m 位の湧き水がある所から登山口までは雑木林となります。この湧き水は岩の下から出ていて、それより上は全く流れがありませんので、完全な伏流水のようです。

#### 〈感想〉

前回の徳本峠に続き、股関節のリハビリのため、ゆっくり比良を歩きました。比良は毎年 2、3 度訪れますが、全山縦走が多く、今回はリハビリ登山ということで、まだ歩いたことのないワングル道・荒川峠道を含むショートルートを選択しました。

ワングル道は「難路」と注意書きがありますが、実際に行ってみると崩落箇所など不安定な場所はほとんど無く、登山道そのものとしてはしっかりとした道だと思いました。せっかく十分余裕を持った計画なので、地形と地図をじっくり見比べながら、色付き始めた秋の比良を味わって歩きました。

途中釈迦岳まで誰にも出会わず、山頂で初めてリトル比良方面からやってきた年配の人と若い人に会いました。

山頂は休憩場所になっているようで、ゴミが少し落ちていたので拾いましたが、1L のペットボトルが残されており、どうしたものか迷っていると、その年配の人が持って帰ってくださいました。

釈迦岳からは 30 分も歩けば、北比良への分岐に着きます。

ソロテント泊を始めて間もない時、晩秋のリトル比良からの登りで暴風雨に近い荒天に見舞われ、進退の決断を迫られたことを思い出しました。

北比良分岐手前の見覚えのある三角の樹形と白いザレ地を目にしてホッとしたことを憶えています。

北比良峠へ向かう手前に、数年前の台風で登山道が崩れている箇所があります。ここはおそらく開発時に人工的に付けられた道で、まだ崩落は進みそうですが、さしあたって人の歩く足場だけは踏み固められつつありました。

北比良峠からはシャクナゲ尾根を経て金糞峠に向かうのですが、残念なことに北比良峠のシンボルの松がついに枯れてしまっていました。

金糞峠はさまざまなルートが交わる要衝だけあって、いつもあちこちから人が集まっています。この日もトレランの人や若い人のグループがやって来ていました。若い人のグループは中峠に向かうということでしたが、比良に不慣れなようで少し頼りなげだったので、一言二言アドバイスをして、西側のテント場へ下りました。

金糞のテント場は、行き交う人はあるのですが、テントを張る人は無く、結局貸し切りでした。

次の日が月曜だったこともあって、日帰りの人ばかりだったのでしょうか。

また最近は開放的な八雲ヶ原が定番化しているので、そちらに人が流れているのかもしれませんが。

しかし私には、木々に囲まれ、風も当たらず穏やかなこのテント場が、心を落ち着かせてくれる他に代え難い場所です。

何も無い山の中で静かに過ごす一晩は何と贅沢なことでしょうか。

他の山域で、安全とは直接関係の無い設備の過剰な小屋の横でテントを張っていると、人の家の庭で寝ている気分になり、自分は何をしているんだろうと思うことがあります。

私にとって比良はテント泊縦走の原点であり、もし最初のテント泊が比良でなかったら、幕営地が金糞峠でなかったら、今もテント泊を続けているかどうか、自信がありません。

夜は残念ながらマットのセッティングが悪かったのか、背中が痛くなってしまい、まだ暗い内に目が覚めてしまいました。

ルートが短いので本当はのんびりダラダラと過ごすつもりでしたが、仕方なく日の出と共に撤収を開始し、予定より1時間以上早くテント場を後にしました。

金糞峠から尾根を上がってしばらく歩くと、所々で東側に朝の光に照らされた琵琶湖と対岸の近江富士(三上山)、そしてその向こうの鈴鹿方面から伊吹山地へ至る展望が開けます。徐々に外気が暖かくなり、生気に満ちてくる木々と晴れやかな湖面を眺めながら歩くこの時間は、いつも比良に来て良かったと感じるハイライトの一つです。

立ち止まり立ち止まり、写真代わりに五感で景色を切り取りながら歩きました。

南比良峠に来ると、この時期いつもマムシグサの赤い実が目につきますが、今年も一つよく目立つ赤い房が実っていました。

荒川峠から50mほど下ると陰気な杉植林帯の谷筋に入ります。

浮いた根と落葉と枯れ枝だらけで、時々足を引っ掛けながら黙々と高度を下げる以外にすることがありません。

昔の峠道はこうではなかったはずですが。

杉も本来は欠かすことのできない生態系の一部であり、一概に否定することはできませんが、倒木の多くが杉を初めとする針葉樹であり、それが山肌を荒廃させ砂防工事の需要を生む悪循環を招いていると思うと、このいびつな植林事業はこれでいいのだろうかと考えさせられます。

湧き水を過ぎると、再び雑木林となり、気分も明るくなります。

この辺りは不思議とシデの木が多いようで、大木が何本も倒れていて(イヌシデでしょうか?クマシデでしょうか?私には区別が付きません)、その見事な木肌を見ていると勿体無いような気がしてきました。

単にこれまで他のルートで私が気付かなかっただけなのかもしれませんが。

2日目も人一人見かけず、登山口近くになって、この日初めての登山者に出会いました。

今回も心静かに秋の山と対話しながら山行ができました。

クライミングや雪山は当分無理だと思いますが、翌日も特に股関節の痛みがひどくなった様子も無く、リハビリもそれほど悪い方向には行っていないようで、まずは一安心です。